

博物學大家列傳

ハクスレー格言集

理學博士 渡瀬庄三郎

1

ハクスレーが世を辭してから、今年で丁度十三年になるが、學界は未だ氏が死を追悼して止まないものである。氏が非凡の人と爲りや、學術の爲めに盡瘁した苦心努力の物語は、今なほ學界の美談、後進の獎勵として、人々の記憶に新に、口から口へ傳へられて居る時代であるから、是等が完全なる記録と成つて世に出る迄には、まだ多少の時日を経過せねばなるまい。氏の令息レオード、ハクスレーが著せし、乃父の傳二卷の如きは、寧ろ家庭と交友との方面に於けるハクスレーに詳にして、莫大の參考にはなるか、これが五十年間生物學上の新發見や、學術の普及や、思想と研究の自由の爲めに、絶大の精力を傾注し、常に雲となり火の柱となつて、學界指導の任に當つた一大生活の實録としては、何となく物足らぬが如く考へらるゝのである。勿論骨肉の關係ある者の著した傳記であるから、兎角記述の遠慮勝ちになりしは、また已むを得ない事と察せらるゝのであるが、要するに今日の有様にては、如何なる人の手に成るも、氏の傳記は、多少斷片的たるを免かれぬものと考へらるゝのである。此頃小閑を得て、ハクスレー格言集の翻譯を試みた。一言半句も無駄のない、強健達意の氏が文體は、到底余が如き拙き筆を以て、巧にこれを邦文に移す事は出来ない。唯僅かにその意を傳ふを得ば足れりとしたから、威

嚴ある原文の筆致を、損する事決して少なからざりしは、誠に遺憾の至りである。若しその原文の意を得るに於て、大なる誤がなかつたならば、余の最も幸とする處であるが、是とても敢て深く自信の存する次第ではないのである。

格言集は、もとハクスレー未亡人が、氏の著書書簡等に散見する金言教訓人生觀等、總じて三百八十五節を撰みてこれを一書となし、去年六月を以て世に公にせられた者であつて、今爰に譯出せしものは、僅かに六十一節に過ぎぬのである。別に何等の意なく、全篇を通じて隨時これを採譯したものであるから、その數は少ないが、氏の一生を支配せし思想、及び氏の性行の一斑を窺ふには、足るものならんと思ふのである。

格言集既に氏が思想の斷片である。然していま此處に譯出するもの、僅かにその一小部分にして、固より斷片の斷片たるに過ぎずと雖も、嘗て本誌に掲げし、氏が肖像記の附録として、ここに載することゝした。他日機會もあらば、尙ほその餘れる者を譯して、更にこれを増補せん考なり。

明治四十一年八月

一

自然界の研究に従事し、その知識の増殖を謀らんと欲する者は、單に學海に於ける諸大家の學說に據つて、事物の眞偽を斷定すべからず。是等人士の爲には、懷疑は最高の義務にして、盲従は容赦すべからざる唯一の罪惡なり。

二

天賦の才能なきものが、徒らに方式と勉強とにのみ頼りて、學術に秀いで、世に成功せんと企つる程、迷想の甚しきはなし。

三

學術、技藝、其他有ゆる人事の世界に於ては、衆人凝議の中には明案生ずべしと雖も、それは僅かに、一二人士の所見に基づきて發するものなり。

四

世にはよく現代の實相を觀破し、よくその情況を反映代表するを以て、偉人と稱せらるゝ者あり。何人よりも巧に諸人の考を述べしと云はれしヴォルテールの如き是なり。深く現代に潜伏したる事相を推知し、遠き未來の發達を洞察反響するによつて、偉人と稱せらるゝ者あり。デカルトの如き是なり。

五

論理的推斷とは、愚者の案山子にして、智者の烽火なり。

六

智者の發すべき唯一の問題にして、且つ誠實なる者の常に自問すべきは、こは眞か偽かこの一事のみにして、他に及ぶの要なし

七

世は苦難と無識とを以て充滿す。吾人が明著なる義務は、各自が生活の小範圍に於て、少しなりともこの周圍の苦難を寛め、無學の境裏に光明を與ふるに在りて、吾人が此の世を去るに方りては、嘗て此世に生れし前よりは、少しなりとも之を幸福と教化の域に進ましむるに在り。

八

歲月の齒は、何物をも噛み盡くすを得るも、只眞理に對しては、その勞無効なり。

九

天才の爆發力は、到底火藥などの比に非ず。若しこの勢力を指導すべき知識にして、缺乏せんか、友と敵との差別なく、その間に慘毒を流すの機、決して少しとせず。

十

他人に對して思慮深く、雅量豊かに、謙讓の徳を備へ、自尊よく持す。是れ即ち眞の紳士淑女の標徴なり。世に有り觸れたる同名僞物と、混同すべからず。

十一

凡べての人類が自由にして、且つ平等なりと云ふ説は、假令如何なる意味に於ても、また如何なる時に於ても全然有り得べからざる虚構事なり。

十二

人口問題は、眞にこれ「スフンクス」の謎にして、如何なる賢明なる爲政家も、その解決に苦しむ。繁殖過剰の慘劇に比せば、如何なる問題も論するに足らざる程の小事なり。

十三

人間一代の中には、必然他人の指導に甘んじて、これに服さねばならぬ時と、また如何なる障壁をも排して、決然自から進むべきの時あり。

十四

獨り動物が、何か他の動物或は植物によつて、その生命を繋ぐのみならず、植物自身も、また互に輸贏を爭ふものなり。生物の種族を形成する個體の面々は、恰も將に沈没せんとする船の乗込人の如く、善く泳ぐものと外

は、陸に達するの望なし。

十五

宗教界の正派と稱するものは、恰も思想界のブルガン家の如し。新しきは學ぶ能はず、古きは忘るゝ能はず。

十六

新しく發見されたる真理が、邪説異端として始まり、迷信となりて終るは、歴史の警戒する所にして、何時も變りなき發達の徑路なり。

十七

理學研究の精神は、その研究によりて得たる實果に優りて、更に價值あるものなり。理論を無視して信ぜられたる真理は、理論を尊重したるに係はらず陷つたる誤謬よりは、その弊害を世に流すこと大なり。

十八

真理を確定し、亞いで之れを世に報告せば、理學は正にその任務を全ふせしものなり。

十九

信經クリドを採用したる時は、即ち理學が自殺を遂ぐるの時なり。

二十

世に跳梁跋扈したる誤説を斃すを以て、新しき真理を發見するよりも、満足を感じる人あり。フリーストレイの如きその一人なり。善政の施行を欲するが爲めに、瞞着欺騙の徒を除くを以て、神の攝理を援くと信ずるものあり。研究と思想の自由を謀るを以て、單に知識の増殖を企つるより重しとなすものあり。真理の勝利を期してその策戦計畫に盡瘁したるカルノー一族の如きは、即ち是れにして、少くとも實際真理發見の戦場に望み、身に

萬斛の苦を嘗めたる將師と、その功を同ふすべき者なり。

二十一

物質上の進歩は、また道德及び知識の進歩に關係なしとせず。彼の敏銳なるベツケー、シャープ女が、一年一萬磅の收入あらば、德操充實の生涯を送る敢て難きに非ずとの觀察は、國家の經濟に於ても、またその適用なしとせず。且夕饑餓に迫まり、究乏爲す所を知らざる人民が、毎に野卑暴戾の所行に陥り易きは、蓋しまた故なきに非ず。

二十二

余は信ず、理學は單に訓練と、組織構成とを経たる常識に外ならずと。唯理學が常識と異なるは、恰も老功の兵が新兵と異なり、鍊達なる劍士の使ふ刀が、蠻人の振り廻す棍棒と、その効用の程度を異にするが如し。

二十三

生存競争は、單に物質界に於て行はるゝのみならず、また思想界に於ても然り。學説は、恰も思想界に於ける生物の一種の如く、それが存立の權は、他の競争者の抵抗壓迫に對して、之に打勝つ能力の存在と、併立するものなり。

二十四

何人も老境に達するまでは、シエークスビーヤを完全に會得する能はず。假令青年の審美的本能は、これによりて満足を感じざるに非ずと雖も、生活の晩境に進みたるものが、その豐熟圓滿の經驗に照して、はじめてその一致する所あるを知るを得ればなり。

二十五

書籍は、文學には貨幣なれども、理學には表計器たるに過ぎず。

二十六

古昔哲學者の缺點誤謬は、多くは自國の語よりは、何等の國語に通せずして、思想とその符徴たる言語とを、混同したるに基づくものなり。

二十七

人生最惡の難事は、吾人が何事も、意の儘に、爲し得るの時期に於て遭遇す。

二十八

世の實際家は何と云へ、結局この世界を支配するものは思想なり。時によりては、臆測粗雜に流れたる思想なり。故にたとへ、人生日常の事物より、如何程遠ざかりたるにせよ、物の理は、出来る丈け正確なるを要す。出来る丈け誤謬より遠ざかりたるを要す。

二十九

僅少の智識は危険なりてふ諺は、甚だ危険なる語と云ふべきなり。知識にして眞正確實なる者たらしめば、如何程少量にても、貴重ならざるはなし。若し僅少の知識が危険なりとせば、危険の恐なことまで云へる程の知識を有するもの、果して何地に在りや。

三十

忍耐と不撓不屈の精神とは、その重量二倍の怜悯にも優つて尊重に値いす。

三十一

余は確信す、箇人と團體たるを問はず、若しその行爲が、或る倫理の理想的模範を仰慕して、之れに達せん

と勉むるに非ざるよりは、嘗て何等の價值ある事業を成し遂げたることなく、將來に於ても、また決して、何等の價值ある目的を達するの期、到らざるべし。

三十二

教育最大の効果は、各自が嗜好の如何に關せず、爲さねばならぬと極まつた者は、決然これを成し遂げ得るの力を養ふにあらん乎。これ教育の第一義たるべき者にして、假令如何程早くその訓練をはじめるとも、恐くは終生不完全に終るを免かれざるものなればなり。

三十三

人生重大の目的は、知識の修得に非ずして行爲なり。人に必要な知識の量は、即ち之を同化し、これを組織構成して、行爲の基礎となすを得る丈け修得せしむれば足るものにして、之れ以上を與ふれば、却つて危険の恐なしとせず。知識の不消化が、却つて痴鈍を醸すこと、恰も梁食に飽きたるの徒が、身體の活動を缺くが如し。

三十四

余が經驗によれば、此の世に於ては、何事も放任した儘にて、自然に整備を告ぐるものなし。

三十五

理學者と否らざるを問はず、若し此世に於て、嘗て過失に陥りし事なしと云ふ者ありとせば、そは生來何等の爲す事もなく、手を束かねて碌々日を送りし人にのみ存す。

三十六

文學と理學とは、二個の別物にあらずして、同一事業の二面なり。

三十七

世に技倆才智ある者に通有なる缺點は、人から反對され、批評さるゝ事に堪えざるにあり。極力反對の態度を持して、斯る趨向と戦ふ人々も、知らず識らず、阿諛追従者流の道具となるを免かれず。『大家』、『門弟』、『學派』は、實に學界の呪咀にして、學術研究の精神に障害を及ぼす、他の總ての敵を合したるものより大なり。

三十八

世の人々は、單に學問とか伶俐とか云ふものゝ、一生殆んど何等の價值ある者に非ざるを知らざるが如し。精力と概括力に富みたる知能の如く、教育の力によりては得べからざる者こそ、最も尊重すべきものなり。

三十九

學術界に於て成功せんと欲せば、^{カパシティー}能力、^{インダストリー}胆力、^{エネルヂー}精力、と此三者の稀有なる結合を要す。若し此の三者を備へんか、假令晝間は商業に従事すとも、必ず餘暇を得て、己が好む學問の研究に従ひ、成功の期に到達するを得べし。此の三者の併備を缺かん乎、單に己が本務に服して、他を窺ふべからず。諺に匙を作らんとて角を損すと云ふこと程、青年の運命に、憾多きはあらじ。これあるがため、終生文學や理學の周邊に彷徨して、然かも真にその門に入る能はず、碌々何等の業績をも舉げ得ずして、歲月を送るものあり。若し此の人にして職を他に求めしならば、相應の効果を舉げて、社會に有用なる個員たるを得べかりしならん。

四十

善良なる書籍は、恰も一片の肉の如し。世の愚者は蒼蠅の如く、その上に集り、各自が勝手にその書より抽き出す様々の考は、恰もその肉上に産み付けられたる蠅の卵が、蠢爾たる蛆となりて這出るの狀に似たり。

四十一

兒童が人の一生に及ばず變化は、如何なる他の境遇よりも大なり。人の性情を圓熟さする、幼兒の感化程驚く

べきものなし。子供のなき時に比すれば、實に人の生活は、方さに十倍の價值を増すものと云ふべし。

四十二

兒童は聰明なる教訓を以て之れを導け、是れ道德なり。聰明にして且つ美なる事を以てせよ、是れ宗教なり。

四十三

意を決して斷行せよ。然してその結果は、來るに従つて之を處せ。優游不斷は、何等の善果を齎らす者に非ず。

四十四

世は聰明にもあらず、また公平にもあらず。去りながら、この痴愚と偏頗の缺點を補はんが爲めには、嘔吐すべき程感情的なり。

四十五

余が努むる處は、余が抱負をして實際の事實と一致せしむるに在りて、事實をして余が抱負と合せしめんと、試むるものに非ず。

四十六

現代の開化は理學の發達に基いす。試に理學の附與する賜物を、我國家より除去せよ。我國が列強間に優越したる地位は、一日もこれを維持する能はざるべし。これ理學の力は、人類の知識と道德上の勢力とをして、獸力に勝たしむる、唯一の武器なればなり。

四十七

學術の一大悲劇は、優麗なる假説が、醜き事實によりて、殺害さるゝにあり。

四十八

何をか完全なる普通教育リベラルエジュケーションの効果を挙げたる人といふ。幼時に在つては、よくその身體の訓練につとめ、意志の命令に應じて、快然よくこれに従ふを得。知能は明晰冷靜にして、恰も推理の器械の如く、假令は蒸氣機關が一方蜘蛛の巢の如き細き糸を續ぐと思へば、また重き錨の如きものをも鍛ふを得るが如く、大小輕重を通じて如何なる業務にも服するを得。心裏にはよく自然の大法則を知得して、またその作用に通曉す。去りて萎縮したる隱遁家に非ずして、常に旺盛なる元氣を鼓舞し、その感情は強健なる意志の制御に服して、慈悲深き良心の僕となり、天然と人爲たるに論なく、凡ての美を愛するを知る。卑劣陋醜を惡む蛇蝎の如く、他人を尊重する猶は自からを尊重するが如くす。是れ完全なる普通教育の効果を普く挙げ得たる人の資格なりと謂つべし。

四十九

教育とは、第一自然の法則に就きて、人智を練磨するに在り。然して余の云ふ自然といふものは、單に物質と勢力の謂に非ずして、人とその行爲をも包有す。第二は愛情と意思とを適合して、この自然の法則に逆らはず、喜んでこれと一致して行動なさしむるに在り。この兩者を併稱して教育と云ふ。

五十

現時の英國に於て緊要なる問題は、石炭が今後何年間繼續して、採掘に堪ゆるや否やに非ずして、理學の眞理と、理學者が研究に費す多大の勞力とを、正當に理會省察するに在り。

五十一

ダーウ井ンが解決せんとしたる、大問題の性質を知らんと欲せば、先づその大著に述べられたる許多の事實を基礎とし、また氏が一生の模範によりて示せられたる、研究の方法を了知するを要す。ダーウ井ンの聰明と、事實を確定するに要したる偉大の精力と、正確なる事實の前には、如何なる假設も、蔽履の如く、之を放棄するの

宏量とは、氏が唱道せし學說をその終局の點まで追究するに方て、必要缺くべからざるものなるべし。果してダーウ^井ンの教へし所のものが、不朽の眞理なる否やは、何人も今日これを豫知斷言する事能はざるべしと雖も、余は此處に確證して憚からざるものあり。そは他にあらず、吾人の知識をして更に近くダーウ^井ンが達せんとせし、眞理の本體に接近せしめんとせば、氏が研究の方法を實踐し、一意専心眞理に貢獻するの精神を鼓舞し、正確なる知識の増殖には、何事をも犠牲に供せんとするの決心なかるべからずと。

五十二

體力に於ても、智力に於ても、また徳性に於ても、女子は男子に比して優劣なしと云說に、左袒するの理を發見せずと雖も、是等の諸點に於て、男子に勝りたる女子は、世に決して鮮なからず。余は竊かに惑ふ、如何に薄弱痴鈍のものと雖も、若し男子なれば平然これに従ふを得るの業務も、女子は如何程有爲のものと雖も、これに従ふ能はずとは、これ公正にも非ず、また國家の政策としても、その當を得たるものと云ふを得ざるに非ずや。

五十三

人生の要事は、幸福を得んとするよりは、寧ろ平和と自尊とを求むるにあり。

五十四

眞理が人類一般に廣まるは、成るべく速かなるを望む。要は唯、果してそれが眞理なるや否やを確むるにあり。

五十五

人の生活は、恰も人馬絡繹の街路を往くが如し。いつも向側が故障少なきが如く見ゆ。されど一度往還を横切つて、彼側に達して見れば、雑沓は更に前者と異ならざるを見ん。

五十六

苟もこの世に生きながらへて居る間は、常に、體力氣力の旺盛ならんを欲し、一朝精力衰退の期に際せば、瞬時も速く死の來らんを希ふ。

五十七

節儉とは金錢を珍藏するの意に非ずして、寧ろ裁智ある法に随つて、これを使用するに在り。

五十八

リニヤスは何と云へ、人は理性の動物に非ず。殊に親心もて子に對する時に於て然り。

五十九

何等かの刺戟に訴ふる事なくして、腦力の使行に堪えざる人は、速に職を手工に替ゆべきものなり。これ頭腦を使ふために、生れたる人に非ざるを證する、自然の表示なればなり。

六十

信仰の理性的基礎と稱するものは、往々吾人が本能を批護するため起したる、極端なる沒理的の企圖たる事を忘却すべからず。

六十一

凡そ此の世に、人間程奇怪なるものはあらず。馬の神經質と、驢馬の執拗と、駱駝の惡意との混合物にして、只時々、光明赫耀たる天使の靈容が、その間に出沒往來するを見る。然して若し、一朝何事も意の如く爲すを得るの地位に達せば、如何にしても之を御する能はざるの動物なり。